

■研究情報

心理学と出会って

木村 美奈子

(2001年度児童教育学科卒業生, 2010年4月より名古屋芸術大学専任講師)

キーワード：映像理解, 幼児

社会人選抜で入学した愛知県立大学を卒業し、8年になる。県大で心理学に出会い、私の人生は大きく方向転換した。心理学と出会ったことで、人の心を科学的に捉える面白さを知り、研究者になろうと決意したのだ。卒業して今日まで苦勞の連続であったが、夢は叶えられた。それは長い間、ほぼ専業主婦であった私にとって、文字通り夢のような話であった。研究者を志してからは、他にも幾つかの夢が生まれ、その夢が叶えられることを経験した。初めて論文¹⁾を投稿し発達心理学会の学会誌に掲載された時は、まるで、自分の生きた証が心理学の歴史に刻まれたようで、言いようのない喜びを感じた。そして幸運にも、その論文は第17回学会賞を受賞し、喜びは倍増した。

心理学は、この世界を「心」というフィルターを通して見ると、どのように見えてくるかを教えてくれる。フィルターはその人の生まれもった特性や経験や環境により、いろいろな様相となるが、ある側面から見れば、多くの人に共通点や決まった傾向を見出すことができる。それを発見することが心理学の研究の面白さである。中でも発達心理学は、子どもの目から見たらこの世界がどのように見えているかを知ることであり、自分も子ども時代を経験したにも関わらず、その見え方は知れば知るほど新鮮で、驚きに満ちたものであった。

例えば、私が初めて出会った研究は、子どもが自己の鏡に映った姿を見て自分と分からず、他者が映っているかのように、また、鏡の中に別の空間があるかのように行動することを報告しているものであった。今日、当たり前のように鏡を使って自分の姿を見ている私にとって、子どものそうした行動は非常に不思議で魅力的で

あった。そこで、卒業論文では、鏡をビデオカメラの映像に置き換え、自己像認知の発達を調べる研究と、ビデオモニターに映し出される空間をどのように捉えているかを調べる研究を行った。その後、大学院での修士論文でも、卒論に引き続き映像理解を取り上げて研究を行った。そこでは映像世界と現実世界との相互作用の可能性についての子どもの認識を問う実験を行い、予想に反して、6歳児ですらその可能性を信じている場合があることを発見した。子どもは大人が考えている以上に強く、映像に対してリアリティを感じているのだ。この研究が先述の投稿論文¹⁾にまとめられ、受賞に至った次第である。そしてこの研究は、子どもたちの映像理解のメカニズムについてモデル化し、それを検証する実験へと発展していった²⁾。

子どもの映像理解についての謎解きはまだまだ始まったばかりである。推理小説のように様々なピースから全体像を探り当てる作業は、時に苦しいこともあるが、少しでも全体像が垣間見られた時の喜びは計り知れない。それがまた、次の研究へと私を誘っている。そのような喜びを、私の後輩たちにも研究を通して感じ取ってもらえることを切に願っている。

注

- 1) 木村美奈子・加藤義信 2006年 幼児のビデオ映像理解の発達：子どもは映像の表象性をどのように認識するか？ 発達心理学研究 第17巻, 第2号, 126-137.
- 2) 木村美奈子 2008年 ビデオ映像の表象性理解は幼児にとってなぜ困難か？：写真理解との比較による検討. 発達心理学研究 第19巻, 第2号, 157-170.